鉄道稲荷

毎年「母の日」は、私のお寺境内にお祀りする「泉養稲荷社」の大祭『きつね稚児行道』が行われます。健やかな成長を願い 100 名の子供たちが稚児衣装を身にまとい、顔はかわいらしく「きつねメイク」、頭に「きつねのお面」をのせ、白い尻尾をつけてお練りをいたします。若いお母さん方は「稚児の後ろ姿が可愛過ぎてたまらない！」と言ってそのポーズで熱心に写真を撮っておられます。当日私も法衣に尻尾をつけ「きつねメイク」で臨んでいますが、「和尚さんがすると古だぬき稚児や！」と言われてしまいます。

お稲荷さまは人が大勢集まると大変お喜びになられます。「100 名と言わず、もっと稚児を集めろ！」と言われます。大きな声では言えませんが、佛と違って神さま系の方々はわがままで御守がたいへんです。そういう時は、「これ以上人が来ますと当寺の駐車場は満杯になってご近所に迷惑になります。できません」と、出来ない事は出来ないとはっきり断って話し合いで納得していただきます。こういうやりとりの仕方は代々私の曾祖父から受け継いだものです。これが出来ないと御守役は命を取られることもありますので、御祈祷に臨む時などは背筋を伸ばしてお稲荷さまと慎重に話し合いを重ねなければなりません。

当寺の「泉養稲荷」は、地元では通称「鉄道稲荷」と呼ばれています。明治 22 年に旧国鉄「東海道線」が愛知から岐阜にかけて開通しました。私のお寺の前ではそれに伴う木曽川の鉄橋建設工事が開通に向けて急がれていました。すると、ある日から工夫さんが鉄橋から川へポトンポトンと毎日一人ずつ転落します。引き揚げてみますとどこにも怪我もしていません。無事です。しかしそれが毎日続くものですから工夫の親方が当寺住職であった曾祖父に相談に来たそうです。親方からその状況を聞いた曾祖父は、そのお告げ的なる振る舞いからすぐにお稲荷さまの所へ向かいました。お稲荷さまは人の集まる賑やかさは好まれますが、特に金属から発する騒音などは嫌われます。「静寂」がお好きです。曾祖父は「これから日本にとって鉄道がどれだけ重要で、開通後も民のために御辛抱くだされ」と話し合いをしたそうです。

開通２年後の濃尾大震災で、長良川の鉄橋は崩壊しましたが、木曽川の方はビクともしなかったそうです。それがまた評判となり「鉄道稲荷」と通称されるようになりました。　俊徳丸